

# 『ガリム』における究竟次第について ——菩提心思想と解脱・輪廻のあり方を中心に——

石 部 道 明

## 1. はじめに

ツォンカパ (Tsong kha pa, 1357–1419) の著書『ガリム』(*Sngags rim chen mo*<sup>1)</sup>) 第 13 章では、後期密教の究竟次第が概説されている。本稿では、同章に説かれる聖者流と『カーラ・チャクラ』系統の究竟次第に関する特色の一端を報告する。

## 2. 俱生歡喜と不変の樂に見る菩提心思想

### a) 菩提心の展開と『大日經』の菩提心句の影響について

大乘仏教で菩提心がとくに重要視されるなか、後期大乘の時代になると、従来の悟りを求め行ずるといふ菩提に向かう心である菩提心のほかに、菩提を自性とする心であるところの菩提心が説かれるようになった。

この「菩提を自性とする心」は、『大日經』の「住心品」の三句の法門の箇所、「菩提とは何かといえは、実のごとく自心を知ることなり」と説かれる菩提心である。すなわち菩提とは自らの心を知ることであり、心と虚空と菩提の三つは別のものではない。菩提を自性とする心が菩提心であると説かれる。

この菩提心の思想は、『大日經』以後、次の定型句となって結実するのである。

菩提心離一切物，謂蘊界處能執所執捨故，法無有我，自心平等本來不生，如大空自性<sup>2)</sup>  
sarva bhāva vigata skandha dhātvāyatana grāhya grāha kaiśca vivarjitam  
dharmanairātmya samatāyā sva cittam ādyanutpannam śūnyatā svabhāvam<sup>3)</sup>

なお、この「菩提心句」はジュニャーナガルバ、カマラシーラらに影響を与え、さらに後期密教の諸經典に取り入れられていく<sup>4)</sup>。父タントラの『秘密集會』第二章ではこの「菩提心句」は一切如来の請問に対して五仏の中の毘盧遮那仏が説く菩提心として用いられる<sup>5)</sup>。また『秘密集會』の究竟次第である五次第の第四次第で「菩提心句」が用いられており、光明が菩提を自性とする心であるところの菩提心につながることを指摘されている<sup>6)</sup>。

### b) 母タントラ系の俱生歡喜と菩提心

また、母タントラの究竟次第に説かれる四歡喜の第四の「俱生歡喜」が菩提を自性とする心すなわち菩提心に相当するという点も指摘されている<sup>7)</sup>。『ガリム』第13章でこの関係を述べる次の文章が注目される。

それはまた『大印契の明点』第五章の中で、「なぜなら、その歡喜は顯明であり、顯明増輝は最勝（歡喜）と言われ、殊勝歡喜は（顯明）近得と知られ、俱生（歡喜）は光明である<sup>8)</sup>」と（『教説の穂』で述べていることと同じことが）言われている。『教説の穂<sup>9)</sup>』においてこのように訳されているのは正しい。このように、四歡喜と四空が同じ意味のものとして説かれるのは、一般に意図されていることであって<sup>10)</sup>

上記の文章は母タントラの究竟次第の修法である四歡喜が父タントラの究竟次第である五次第の四空と同義であり、俱生歡喜が光明と同じものであると述べている。よって俱生歡喜も菩提を自性とする心であるところの菩提心である。

### c) 『カーラ・チャクラ』における不変の樂と菩提心

次に『カーラ・チャクラ』における不変の樂と菩提心との関係について、『ガリム』では次のように説かれている。

それを生起することは、憶念（六支ヨーガの第五支）に依拠しているのであって、憶念の段階でチャンダーリの火によって溶かされた菩提心が頭上から摩尼まで下ったことから、四つの歡喜が生じるころの第四の俱生歡喜が不変の樂であって、（第六の）三摩地支であるからである<sup>11)</sup>。

この文章は、四歡喜の第四の俱生歡喜が不変の樂であることを述べている。したがって、不変の樂も菩提を自性とする心であることが言える。

以上のことから、五次第における光明と、四歡喜の中の俱生歡喜と、六支ヨーガの第六支の三摩地である不変の樂は、いずれも菩提を自性とする心すなわち菩提心であることが確認できた。よって、『大日経』の菩提心思想は無上瑜伽タントラの最後の経典である『カーラ・チャクラ』まで継承されていると言える。

## 3. 生有・死有・中有における仏の三身と、解脱・輪廻について

次に生有・本有・死有・中有という輪廻の構造における解脱と輪廻のあり方を考察した。光明と俱生歡喜はともに菩提を自性とする心であることから、四空と四歡喜は仏となるために行ずる修法である。この修法に関して次の指摘がある。

2つの体系は、『秘密集会』の解釈学派や母タントラのウッタラタントラの段階で接近を

## (70) 『ガリム』における究竟次第について (石 部)

はじめ、四空と四歡喜はパラレルであるという点で、しだいにコンセンサスが形成されてきたように思われる。受胎と死という、まったく正反対の現象をパラレルとするのは、一見奇妙な学説に思われる。しかし、仏教の輪廻転生説においては、死は中有の誕生であり、中有の衆生の側から見れば、受胎は死にほかならなかつたのである<sup>12)</sup>。

このことは先に引用した『ガリム』の中でも釈説されている。上記の内容より、四空は死する時に行われる修法であるので死有でのことであり、四歡喜は中有の身の受胎における修法であるので中有の間でのことであると考えられる。

ところで、生起次第と究竟次第の二次第の最終目標は仏の三身を成就することであり、そのことに関して『ガリム』には次のように述べられている。

これらはまた二次第の浄化基盤を生・死・中有の三つとし、その三つが(応身・法身・報身の)三身として出現するあり方について清浄な確定を得る必要があるけれども、第一次第(生起次第)の浄化基盤と浄化手段の詳しい説明の仕方については、『安立次第の注釈<sup>13)</sup>』にすでに説き明かされているので(ここでは)述べない<sup>14)</sup>。

四有からなる輪廻の構造の中の生(本有)・死(死有)・中有がそれぞれ浄化されることによって、応身・法身・報身の三身が成就されるのである。

以上の四空と四歡喜の関係をもとにして、五次第の修法過程<sup>15)</sup>に四歡喜の修法を組み入れて、法身・報身・応身の成就するあり方を考察した。

**(報身・応身の成就過程)**

①死と同時に中有における身が形成される。②死後の四大の解体のあと、第六識の浄化が三空まで行われ、中有では三番目の歡喜まで進む。つまり、死有での空(顛明)→極空(顛明増輝)→大空(顛明近得)と、中有での歡喜→最勝歡喜→殊勝歡喜とがパラレルに進行する(第二次第の順観)。③その後、逆観して幻身を得る(第三次第)。④再び順観して、死有では四空まで、中有では四歡喜まで進む。死有で一切空(光明)を、中有で俱生歡喜を得たとき、法身を成就する(第四次第)。⑤再び逆観した後、二種の禪定(=頓観と漸観)によって有学の双入の身が得られる。⑥その後無学の双入の身が成就され、これが報身・応身に相当する。

**(輪廻のあり方)**

次に五次第の修法過程における輪廻する位置については、第四次第の光明を成就したあと第五次第で逆観して顛明近得となる瞬間であるとされる<sup>16)</sup>。つまり、第五次第の前半部分で逆観して二度目の幻身を完成するに至らないとき輪廻する。しかし幻身を得ることができれば解脱の方向に進むのである。したがって、幻身を得ることができるかどうかは解脱と輪廻の分かれ目となる。

## 4. むすび

「菩提心句」に見られる菩提心思想の無上瑜伽タントラにおける継承に関して、『ガリム』を用いて考察した結果、父タントラの光明と母タントラの俱生歓喜と、そして『カーラ・チャクラ』の不変の樂はいずれも菩提を自性とする心であるところの菩提心に相当していることを確認した。また四空と四歓喜の2つの過程は平行なものとして統合されるという指摘をもとに、法身と報身と応身の成就における四空と四歓喜の修法のあり方を述べた。かつ法身の成就後に幻身を得られるか否かが解脱と輪廻の分岐点であることを示した。

- 1) P. 6210. テキストは、宗喀巴『密宗道次第広論』青海民族出版社、1995を使用。
- 2) 『大日経』第七巻供養次第法の「増益守護清浄行品第二」大正 18, 46b.
- 3) 『大毘盧遮那現等覺付属供養儀軌』D. 2664, 19a5-6; P. 3488, 340b8-341a1 の中に引用。
- 4) 生井衛「菩提心偈に関する一考察」『密教文化』91, 1970, p.35, 松長有慶「密教における菩提心思想の展開」『仏教思想史』3, 平楽寺書店, 1980, pp.276-282等を参照。
- 5) Yukei Matsunaga, *The Guhyasamājatantra, A New Critical Edition*, Osaka 1978, p.10等。
- 6) 酒井真典『チベット密教教理の研究』国書刊行会, 1974, p.156, 226等を参照。
- 7) 田中公明『性と死の密教』春秋社, 1997, p.235等を参照。
- 8) *Mahāmudrātilaka*, D. 420, 70b4; P. 12, 307a4-5.
- 9) *Āmnāyamañjarī*, D. 1198; P. 2328.
- 10) 宗喀巴『密宗道次第広論』p.544, //.11-15. 御牧克己編『大乘仏典 15 ツォンカパ』中央公論社, 1996, pp.159-160を参照。
- 11) 宗喀巴『密宗道次第広論』p.557, //.9-12.
- 12) 田中公明『性と死の密教』春秋社, 1997, p.238.
- 13) D. 5290, P.6196.
- 14) 宗喀巴『密宗道次第広論』p.546, //.11-14. 御牧克己編, 前掲書, pp.163-164を参照。
- 15) 拙稿「『ガリム』における究竟次第について—五次第の順観と逆観を中心に—」『印度学仏教学研究』58-2, 2010, p.1019を参照。
- 16) 平岡宏一訳『ゲルク派版 チベット死者の書』学習研究社, 1994, p.134と, 齊藤保高著『チベット密教 修行の設計図』春秋社, 2003, p.35に解説されている。

〈キーワード〉 ツォンカパ, 『ガリム』, 究竟次第, 菩提心, 輪廻, 解脱

(高野山大学大学院)